

Let's Know Hiroshima Castle.

しろや！ 広島城



No.45

昭和20年8月6日の中国軍管区司令部防空作戦室

ちゅうごくぐんかんく しれいぶ ぼうくうさくせんしつ

被爆70周年の記念展示として、広島城ではこの夏「広島城と陸軍—昭和20年8月6日防空作戦室」を開催しました。70年前のあの日、広島城本丸に設けられていた中国軍管区司令部防空作戦室では、何が起こっていたのでしょうか。さまざまな手記や証言からたどってみましょう。



西から見た被爆後の中国軍管区司令部防空作戦室 昭和20年秋(米軍撮影：広島平和記念資料館提供)

中国軍管区司令部防空作戦室

史跡広島城内の本丸下段の南側に陸軍の中国軍管区司令部防空作戦室跡がひっそりとたたずんでいます。中国軍管区司令部とは、中国5県の軍政を扱う組織として昭和20年(1945)6月22日に大阪の中部軍管区司令部から分離する形で誕生しました。その組織の一つとして中国軍管区司令部防空作戦室が存在しました。防空作

戦とは、敵味方を含め上空を飛ぶ飛行機の情報を一元的に集め、司令官が高射砲陣地や航空隊へ指揮命令を行うとともに、空襲警報・警戒警報などを発令・解除することを指しますが、本土空襲が激しくなると、役割は空襲警報・警戒警報などを発令・解除することが主となりました。中国5県に対して、警報の発令・解除の権限を持っていたのは中国軍管区司令官(藤井洋治中将)でした。な

お、広島県内には海軍の呉鎮守府^{くれちんじゆ ふ}があり、呉鎮守府司令長官は呉軍地区・徳山地区・内海西部海面に対しての警報を発令・解除する権限を有していました。

防空作戦で一番重要な飛行機の飛行状況は、民間の警防団が管理する防空監視哨^{ぼうくわんししやう}で24時間空を観察し、夜間や荒天時は音を聞き、目撃情報を防空作戦室へ伝えます。このような防空監視哨は昭和20年3月時点で広島県内に33か所存在し、中国5県では100か所以上の防空監視哨が24時間体制で空を監視し、情報を中国軍管区司令部防空作戦室に送っていました。民間の防空監視哨の他、陸軍が設置し兵士が勤務する防空監視哨も数か所存在しました。こうした情報は軍用通信の有線電話で送信され、これを中国軍管区司令部防空作戦室の情報室で受ける役目は、昭和20年4月から動員されていた比治山^{ひじやま}高等女学校3年の学徒（一部女学校を卒業した軍属の人も勤務）でした。陸軍直属の防空監視哨からの無線で送られてくる情報だけは、通信室に常駐していた陸軍航空情報隊の通信兵が担当していました。防空監視哨からの情報は、すべて司令官や参謀^{さんぼう}のいる防空作戦室に集められ、壁にかかる中国地方の地図の目撃情報に対応する防空監視哨の位置の豆電球を点灯させます。そして豆電球の点灯する流れを見ながら、防空作戦室内の参謀たちにより空襲警報・警戒警報などの発令・解除が判断されました。この情報が隣の指揮連絡室や情報室にメモと電光板より伝えられ、そこの学徒（軍属）によって、広島中央放送局や近接する軍管区司令部、各地の防空監視隊へ有線電話を使い連絡する体制となっていました。

ただ、中国軍管区司令部の庁舎は原爆により焼失したため、防空作戦室に関する残存する資料は皆無で、当時の関係者の証言から断片的に当時の状況をうかがうことしかできません。

昭和20年8月6日

昭和20年8月6日の中国軍管区司令部防空作戦室の状況は、どの様になっていたのでしょうか

か・・・それを考える上で、前夜の8月5日の出来事から語る必要があると思われます。

8月5日、午後9時20分に広島地区に警戒警報が発令されます。それが午後9時27分には空襲警報発令となり、午後11時55分空襲警報は解除となります。これは、山口県宇部市に襲撃したB29の一団に反応したものとされます。その30分後、日が変わり6日の午前0時25分に再び空襲警報が発令されます。今度は愛媛県今治市に襲撃したB29に反応したものと推測され、午前2時10分に空襲警報が解除となり、その5分後の午前2時15分には警戒警報も解除となります。この夜は、中国軍管区に隣接する兵庫県西宮市の大半が焦土となる空襲を受けていました。

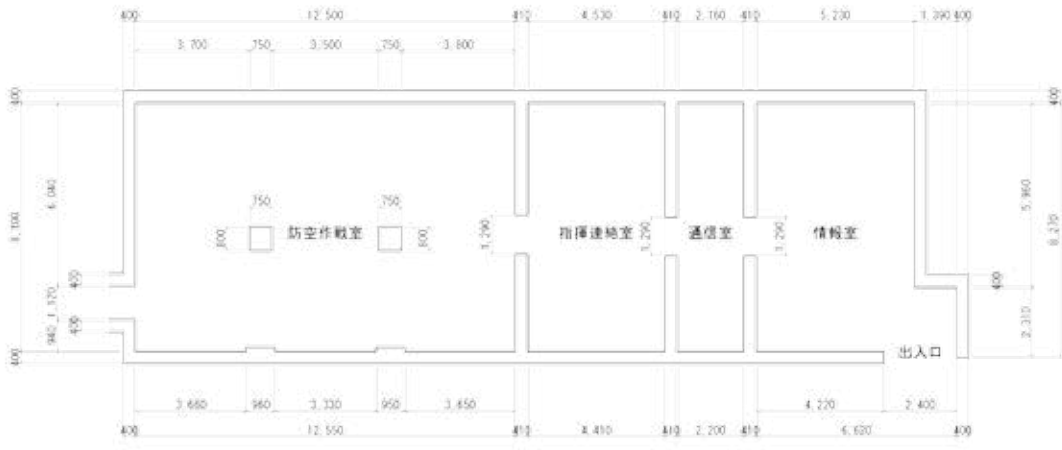
こうしたさなか、北マリアナ諸島にあるテナアン島から原子爆弾“リトルボーイ”を搭載したB29 エノラ・ゲイが科学観測機・写真撮影機のB29各1機を伴い飛び立ち、日本までの約7時間の飛行に入りました。

中国軍管区司令部防空作戦室内の比治山高等女学校の学徒は総員が約90名で、それを3班に分け、約30名ずつが昼夜2交代で業務に従事していました。夜勤の場合、半数交代として午前1時で交代していましたが、この晩は相次ぐ敵機襲撃の情報から全員が部署につくように命令があり、班全員が8月5日の晩から8月6日の朝まで勤務していました。

空襲警報の連続で眠れない夜を過ごした広島市民に、8月6日午前7時9分、警戒警報が発令されます。これは1機で広島上空に侵入し、天候の状況をテナアン島の基地に通報した天候観測機のB29 ストレートフラッシュに反応したもので、すぐに広島上空から離脱したので午前7時31分に警戒警報は解除となりました。この通報は後続のエノラ・ゲイも受信し、原爆投下は第一目標であった広島市に最終的に決定されました。

B29 エノラ・ゲイに対して警報は？

中国軍管区司令部が昭和20年8月13日にまとめた『八. 六広島市被害状況』の中に、「敵機ノ



中国軍管区司令部防空作戦室 平面図(単位：mm) 広島工業大学工学部 十河研究室作成

来襲並二警報発令状況」として

○七〇九 広島縣警戒警報発令

豊後水道及國東半島ヲ北上セル敵大型三機ハ広島縣西部ヲ経テ広島縣中部ヲ巡回後○七二五逐次播磨灘ニ脱去セリ

○七三一 広島縣警戒警報解除

○八〇六松永監視哨ハ西北進中ノ敵大型二機ヲ発見○八〇九更二同哨ヨリ三機ト訂正

との記載が見られますが、8時台の警報の発令については一切触れられていません。なお、7時台の警戒警報は天候観測機のB29 ストレートフラッシュに反応したものと思われませんが、先行する天候観測機は1機なのに3機と記録されている点には疑問が残ります。その後の8時台の松永防空監視哨(現福山市)からの通報を中国軍管区司令部防空作戦室で受け取っていたことは、中国軍管区司令部の報告書に記載がある以上間違いない事と思われま

す。当時、中国軍管区司令部に勤務されていた落合秀明さんは、策戦室(落合氏はこのように記述されています)勤務の兵長から直接聞いたことを含め手記にまとめられており、策戦室(作戦室)には下士官1名と兵長1名が留守番で残っていたようで、「松永監視所よりの通報を受け、留守番をしていた下士官の命令で兵長が食事の将校集会所へこのことを報告に行く。この報告を受け新見中尉と秦少尉は警戒警報は間に合わないの

で、空襲警報を発令させるために策戦室に急いで帰って来る。昨夜から泊まり込みで放送していたJOFK(広島放送局)の放送局員が今朝警戒警報の解除と共に帰局していたため、新見中尉が広島放送局への受話器を取り「八時十二分、中国軍管区情報、敵大型三機、西条上空を西進中、空襲警報発令」と叫ぶ。」と、当時の内部の様子を書かれています。指揮連絡室にいた比治山高等女学校の学徒の一人、岡ヨシエさんは“○八一三 ヒロシマ・ヤマグチ ケハ”と書かれたメモが防空作戦室から出たことをはっきりと記憶されています。ケハとは警戒警報発令の意味で、落合氏の記録とは異なっています。

『広島原爆戦災誌 第一巻』には、「この時、上流川町の広島中央放送局では、情報連絡室から、突如、警報発令合図のベルが鳴った。軍管区司令部から情報が入ったときに、アナウンサーに知らせるベルである。古田正信アナウンサーは、第二スタジオ脇の警報事務室に駆け込んだ。「午前八時十三分、中国軍管区情報、敵大型機三機、西条上空を西進しつつあり、嚴重なる警戒を要す。」古田アナウンサーは、廊下を足ばやに歩きながら、ざっと原稿に目を通し、スタジオに入るなり、プザーを押した。時に八時十五分!「中国軍管区情報!敵大型3機、西条上空を・・・」と、ここまで読み上げた瞬間、メリメリッとすさまじい音、鉄筋の建物がグラッと傾くのを感じ、フワァーッと体が宙に浮きあがった」との記述も見られ、中国軍管区司令部防空作戦室内でもなん

らかの動きをしていたことには間違いないと思われます。

山中高等女学校を卒業し、軍属として中国軍管区司令部防空作戦室で当日勤務されていた斎藤美知子さんは、手記^(注1)の中で「私達の班は五日の夜は夜勤で六日の朝交替の予定でしたが夜半から何度も空襲警報が発令され仮眠もろくにとれないまま朝になり又八時前にも空襲警報が出て交替は大巾に遅れていました。でも間もなく解除になり、ほっとしていましたが又発令とのことで急いで警報板のスイッチを押しはじめ半分くらい伝達し終わった時、後の窓から何千個とも思えるフラッシュ様の光・・・続いてドローオンと言う大音響と共に竜巻の様なものすごい風が入って来て私は吹き飛ばされて少の間気を失っていた様で気がつくとも机の下に倒れていました。」と書かれており、警報発令後、わずかではあります外部に警報の伝達が行われていたことを記述されています。

一般的に、広島市への原爆投下は警報などの発令は一切無かったとされたこととされ、多くの方の手記にもそのように書かれていますが、『広島原爆戦災誌』の手記の中には、広島女子商業学校に駐屯していた陸軍船舶砲兵団衛生教育隊では、「『隊長、敵機！』と、同時に広島市内外、遠く、近く、いっせいに空襲警報のサイレンがけたたましく鳴りはじめた。とたんに、異様な無気味さを感じた私は、糸井中尉の指し示す剣尖の方向を仰ぎ見た。青空の真ただ中に3つの閃光を見た。」(第一巻)、安佐郡安佐町では「朝から非常に暑く、部屋障子を全部あけて、遠くをボンヤリ眺めていたところ、ちょうど、その時、警戒警報のサイレン

が鳴り出した。ああ、またB29が来たなど、空を見ていると、向こうの山の方に白い雲のようなものが、フワッと湧いた。次の瞬間、大きな火炎がグワッと立った。」(第四巻)、安芸郡矢野町では「八時に警戒警報が発令された(呉地区の発令か)^(注2)ので、矢野町役場屋上の防空監視所に登ると同時に、大音響が起こり、思わずその場に伏したが、監視哨が吹きとんだような感じがした。」(第四巻)と、わずかではあります原爆投下直前警報が発令されていたことを示す記述も見られます。これらのことから推察すると、非常に限定的ではあります、警報が市民に伝わった可能性も否定はできないと思います。

被爆70年が経過した今、8月6日8時15分直前の警報の有無について断定的に語ることは困難です。また、中国軍管区司令部の作成した『八、六広島市被害状況』の中には「本状況ニ依リ警戒警報ヲ發令セントスルヤ〇八一五爆撃ヲ受ク」とあり警報発令についてはっきりと発令したと書かれてはいません。

しかし、証言から考えると、中国地方の防空作戦を担当する中国軍管区司令部防空作戦室内では、広島に迫りくるB29の存在に全く気が付かなかった訳でなく、“警報”は防空作戦室内では発令はされた。それを外部に伝える最中に、原子爆弾が広島市の上空で炸裂したと考えるのが妥当だと思います。(秋政 久裕)

(注1) 国立広島原爆死没者追悼平和祈念館「被爆体験記」(執筆年 平成7年)より一部抜粋

(注2) (呉地区の発令か)は広島原爆戦災誌の編者の方が入れたものと思われます。海軍の呉鎮守府も空襲警報・警戒警報の発令・解除の権限を有していましたが、その発令地域は限定されています。当時、呉鎮守府が発令できる呉地区には矢野町は含まれていません。

しろうや
!
広島城

編集・発行

公益財団法人 広島市文化財団
広島城

〒730-0011

広島市中区基町 21-1

電話：082-221-7512

FAX：082-221-7519

平成27年9月30日発行

広島城利用案内

開館時間：9：00～18：00

(12月～2月は9：00～17：00)

入館の受付は閉館の30分前まで

観覧料：大人370円(280円)

シニア(65歳以上)・高校生相当180円(100円)

中学生以下無料

()内は30名以上の団体料金

休館日：12月29日～31日(臨時休館あり)

ホームページ <http://www.rijo-castle.jp>



携帯サイト

「しろうや!広島城」のバックナンバーは、広島城のホームページからダウンロードできます